

## 第38回医家写真展

# 溢れる異国情緒や幻想の世界

東京・銀座の中心地で長らく続いてきた医家写真展も、昨年9月24日から30日までの第38回をもって他会場に移ります。名残惜しさが胸に迫りますが、これからも写真部は続きます。今回の作品評を新井委員から寄せてくれました。なお作品はカラーで紹介するためまとめ掲載しました(順不同・1人1点)。

## サヨナラ京セラ会場

評・委員 新井隆彦

存続が危ぶまれた医家芸術クラブ写真展でしたが、皆様方のお陰で昨年と同じく有楽町の交通会館内の「京セラ・コンタックスサロン」で開催することが出来ました。

念願のカラーで紹介  
全作品はホームページに掲載しました

長年継続しておりました作品の批評に付きましても、昨年同様、私が筆を執る(コンピュータのキーを叩く)事になりました。しかし今年は私の体調不良により、恒例の審査会に出席することが出来ませんでしたので、館長の有益なコメントを聞くことが出来ず残念でした。

## 館長の適切な評に感謝

なお、この京セラ・コンタックスサロンでの写真展は今回で最後。長年に及ぶ鬼沢正典館長の穏やかで且つ適切な批評を頂き改めて厚く御礼申し上げます。

そんなわけで、今回会場で全作品に初めてお目に掛かったわけです。そのため全ての作品の印象が新鮮で驚きの連続でした。私が伺ったのは平日の午前でした

ので、鑑賞に見えられたお客様は多くなく、と言って途切れることもなく、これからの盛会を感じました。

会場で何人かの方と作品について或いは写真について、お話をすることが出来て嬉しくなりました。殆どの方が2点ずつ出展されましたが私の独断と偏見で一点を対象と致しました。また順不同、敬称略で失礼させて頂きます。



先ず会場に入ると目に付きますのがコンタックスサロンの看板の下にある写真「夜の観覧車」作者は椎津重彦です(優秀作品賞)。

椎津先生は、何時もお得意の浅草風景ですが、今回は全く別の作風でした。これは私たち仲間の撮影会で場所がお台場で、時間帯が何と夕方からと言う厄介な撮影会でした。先生は望遠を使ってビルとビルの間にも物の大観覧車を入れました。ビルには照明が光り空はまた真っ暗ではなく観覧車にはイルミネーション

が見えます。私たちは先を急ぎましたが先生は落ち着いてこの場所から撮影して作品に致しました。何時もゆつたりとした先生の人柄の成果だと思えます。

「タモン湾の夕陽」 本村 義雄

勿論、沈み行く夕陽も美しいが、私それよりも海辺の景色特に椰子の木の間に並んでいる割り抜き舟の舷に映える光が気に入りました。また逆光の婦人二人のシルエツトも綺麗でした。先生は目下写真熱に罹患中で猛烈に熱心で日夜撮影に明け暮れております。そこで敢えて言わせて頂くと、全作品の中で先生の写真がデジタル特有の出来上がりになっているのはなぜでしょうか。

「子供が主役の祭り行列」 矢崎 定造

お祭りの撮影が専門で全国に飛び回っている方です、お祭りの写真集も出版されております。題名通り一人の子供が主役で、大勢の大人がその子を取り囲んで

太鼓を叩きながら祭りを盛り上げております。皆でその子が元気になるよう立派に成長するようにと太鼓を叩いている様子が微笑ましく、太鼓の音も聞こえてくるようです。

「壁の美」 白矢 勝一

写真部としては初参加です。ハンブルグでの撮影とうかがいましたが、目の付け所が鋭い先生です。初め古びた壁面を見ますと紙は破れて剥がれ壁自体も汚れていてこの題名はと疑問に思いました。しかし落ち着いてじっと見つめると、それぞれでは半端なポスターがきらっと美しく存在感を見せます。一枚の絵では駄目ですが数枚の端切れが纏まると美を感じさせます。本当に先生の被写体を見る目が長年の美術への経験を感じました。

「ブレイクタイム」 関口 直男

画面中央に赤い花が咲いていて、大きな立派なトンボが羽を休ませています。

まさにトンボの一休みです。この様な被写体はともすると近づいてピントを合わせている間に飛んで行ってしまうのですが、静かな先生なる所以にトンボが逃げず作品になったと思えます。季節を感じさせる作品です。

「ほけ」 村上 泰

先生の2枚の作品は兔に角。ピントが素晴らしいと感じました。殆ど絞っていないのに主題の花は花卉のすじまでシャープに出ています。花の芯も一つ一つまでしつかり写っています。主題以外は明らかに意図でぼかしています。カメラに十分慣れていると思えました。余りにも画質が良いので大判カメラで撮影したのでしょうか。

「梅雨の頃」 鷹橋 靖幸 (優秀作品賞)

画面の90%を露に濡れたアジサイの花が占めています。両上端に濃緑の葉が画面を確実な物にしています。そこにカ

タツムリが存在しているのです。色調も落ち着いて好感を持てます。角出せ槍出せとまさに童謡の世界です。

「芍薬」 逸見 和雄

大きな芍薬の花が一輪画面を占めており、まず、超ソフトの手法です。

ソフトレンズを使用されたか或いはデジタルでソフト化されたのかは判りませんが、兎に角人の目を引く手法です。光の取り方はオーソドックスの半逆光で美しい仕上げになっています。もう一枚の作品展もソフトで彩度を飛ばして明るく仕上げた作品でした。

「眼下に涸沢」 高橋 俊一

私にとっては全く守備範囲外の山岳写真です。登山の苦勞など色々有ると思いますが、写真が写真的な話で、お許し下さい。連なる山の稜線が鋭く聳えており、湧き上がった雲が美を増幅していました。実際の涸沢を「存じ」の方にとっては、別な受け

止め方があると思います。

「マッターホルンⅡ」 木村 典子

2枚のマッターホルン山頂の写真です。先ずは最高の天気恵まれておめでとうと申し上げます。非常に天候が変化しやすい場所です。私の場合も恵まれてケールカーで上りましたとき同様に快晴でした。しかし下りのケールカーでは既に霧で山が見えませんでした。プロの写真家が講演会でこの山頂と水面に映る写真を撮るのに2週間待ったと聞いたことがあります。それはさて置きこの水面に映る山頂の写真は一言で言えば売れる写真とも言えると思います。会場でも多くの方が素晴らしいと感じていました。

「尾根錦繡」 有馬 清徳（優秀作品賞）

整形外科医でもありプロの写真家でもあります。地球上を駆け巡り空から海から傑作をものにしております。しかし時には高度の芸術性のため、私たちには理

解できない写真もありましたが今回は文句なしに美しいそして特殊な撮影（空から）が判ります。長い長い稜線の頂上だけが紅葉に映えて画面の上から下に連続しております。私たちには羨ましい景色ですが、真似が出来ないプロならではの作品です。

「静寂」 大塚 博太

公園または自然園などの一角でしょうか。池を囲んで木道が屈曲しています。たまに暗い水面に太陽が直接映っています。難しい構図を旨くまとめて作品にされました。

「梅里雪山」 莊 昭徳

前回中国での老人の激写で記憶にありましたが、この梅里雪山の作品が来館者の評判が良く綺麗だ、よくこれが撮れたものなどと話が出ましたのでこの写真を取り上げました。中国雲南省辺りの山

中でしよう。この辺りは全く公害に無縁です。空は何時も真つ青に撮れます。高い雪の山が聳え麓には楚々とした部落が見えます。これだけの露出の差が有るのに雪山も暗い部落も旨く表現できています。

「記憶」 大森佐一郎 (優秀作品賞)

雪の斜面に快晴の日が当たり光り輝いています。所々に僅かな木が雪に埋もれています。静かで物音一つ聞こえない深呼吸でもしたまさに癒しの風情です。右下から左上に足跡が点々と続いています。最初は小動物の足跡かと思いましたが四つ足ではありません。題名から推測すると誰か雪面を歩いて行つた記憶と言つことかと思えます。

「雲間からのスポット」 岩瀬 光

(優秀作品賞)

広角レンズで光を追いかけている先生です。今回も全くお得意のパターンです。

瀬戸内の来島海峡の海上風景ですが遙か彼方に海岸の家々が見えます。海上は雲に覆われていますが、所々雲の切れ間から明るい陽が当たりその中心に大きな輪送船が見えます。何時もの傑作を拝見すると、失礼ながら先生のお名前が写真芸術に強く影響しているのかと思つたりしております。

「モンサンミッシェルの干潟」

竹腰 昌明

この有名な撮影場所からモンサンミッシェル寺院を写した写真は多くありますが、著名な建築物を敢えて撮らないでレンズを下に向けた先生の手法には感動しました。広い干潟が向こうまで続いています。何よりも潮が引いた砂の上が光り輝いているのが目に付きました。そしてそこに数人の人が点在しています。逆光写真の手法と思えました。

「赤間宮にお参りする花魁」横倉 弘吉

神前に赤い毛氈を敷いて、正装した花魁が一人跪いて挨拶を受けている風景です。周りの人数が少ないところから見ると公的なお祭りなどの行事ではなく花魁としての儀式かと思えました。真つ赤な毛氈が大胆に画面を横切りしつかりとした写真になりました。

「朝露の花一輪」 大武 省三

何時も綺麗な花を撮られる先生です。今回はシンガポールの植物園で朝露の花を写されました。葉が異様で強烈な模様があり、バックも暗く熱帯のジャングルでの撮影のようです(本当のことですが)そこに小さな赤い花が一つ輝いています。先生は花の撮影で何時も光の採り方に秀でています。

「睡蓮」 大武 秋笙

やはり世界中撮影旅行している先生です。この場所は私も写した事があります。静かな王宮に数多くある池の中の睡蓮

作品抄 (順不同)



「夜の観覧車」 椎津 重彦



「タモン湾の夕陽」 本村 美雄



「子供が主役の祭り行列」 矢崎 定造

です。ベトナムは中国や仏教の影響が大で睡蓮は至る所の池で見られます。この作品は最高な光線で水面の睡蓮、そして水中の茎も綺麗に浮かんでいます。赤い睡蓮の花が一輪、ポイントになっています。世界を知り尽くした先生の作品です。

「日の出を受けて」 稲葉 惣一

早朝や夕景を狙っていると一カ所だけ強烈に日が当たって反射し露出に迷うことがままあります。時にはそのため全体

の雰囲気が壊れてしまう事すら有ります。しかしこの作品は高原の標高1542メートルを示す場所ですので、納得できると思います。下方に木道が見えます、お疲れ様でした。

「漲る若さ」 新井 隆彦

熱海の公園での作品です。この時は1月2日早朝でタクシーに乗って4時間走るよう頼みました。たまたまこの公園下を通りましたら朝日に若者二人のブロンズ

像が輝いていました。咄嗟に車を止めて石段を駆け上がり躊躇うことなくブロンズ像の裏側に行きました。青空をバックに逆光で狙えさえすれば、噴水が光ると思ったからです。その通り綺麗な青空に向かって勢いよく噴水が吹き出し逆光で光り輝いていました。残念ながら直ぐ脇に立木の枝があるのでファインダーを見ながら構図と光を変えて何枚もシャッターを切りました。



「ブレイクタイム」 関口 直男



「壁の美」 白矢 勝一



「眼下の涸沢」 高橋 俊一



「芍薬」 逸見 和雄

「尾根錦織」

有馬 清徳



「マッターホルン II」

木村 典子

文芸特集号の表紙でしたが再掲します



「梅里雪山」 莊 昭徳



「静 寂」 大塚 博太



「雲間からスポット」 岩瀬 光



「記憶」

大森佐一郎



「赤間宮にお詣りする花魁」  
横倉 弘吉



「モンサンミッシェルの干潟」  
竹腰 昌明



「睡蓮」 大武 秋笙



「朝露の花一輪」 大武 省三



「漲る若さ」

新井 隆彦



「日の出を受けて」 稲葉 惣一



「梅雨の頃」 鷹橋 靖幸



「ほけ」

村上 泰

ことし秋の写真展会場

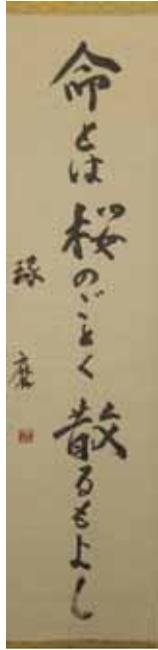
竹腰昌明委員と事務局（西田明子）が東奔西走、「HCLフォトギャラリー新宿御苑」に決まりました。11月19日（木）～25日（水）まで。いずれ写真部員には、お知らせを送ります。

各流26人 39点満開



蘇東坡詩

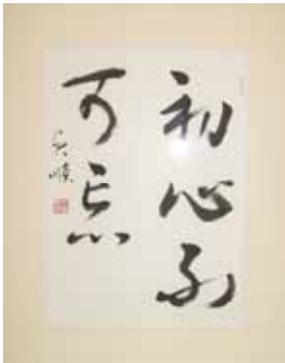
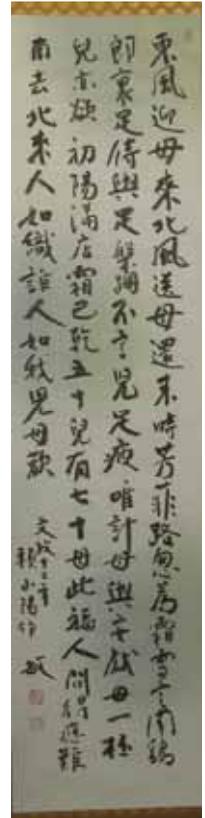
飯田文良  
(格城)



自作俳句

秋葉琢磨

11月3日〈文化の日〉から9日まで東京・銀座画廊  
美術館で開きました。出展者は会員が19人、会員外(賛  
助出展)が7人、併せて26人から39点が一堂に集まり  
ました。以下に作品を紹介しします(順不同・敬称略)。

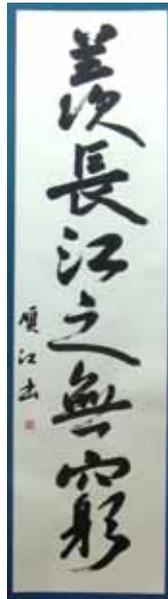


初心不可忘

加瀬幸雄(東垣)

無窮(蘇軾の書)

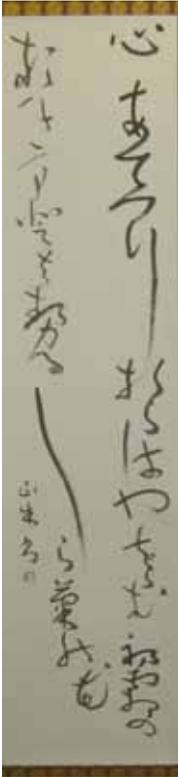
石川順江(紫清)



送母路上短歌(頼山陽)

酒井敏夫(敏)

百人一首 “競作”



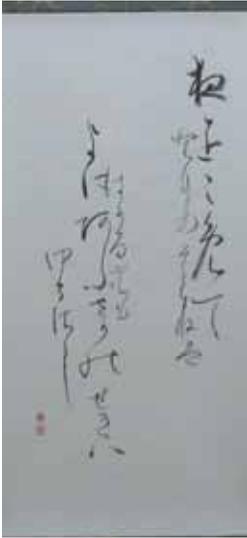
凡河内躬恒

高橋 理佳 (正朱)



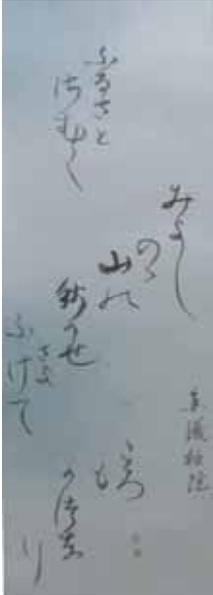
紫式部

梅澤 信子 (宗信)



清少納言

高嶋 純子 (梅操)



参議雅経

小林わか子

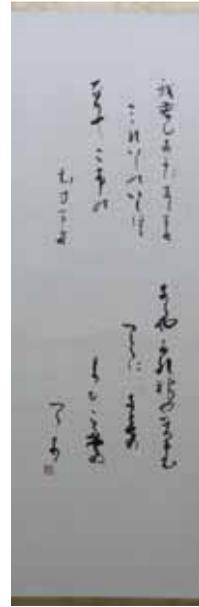
篆刻

黄梁一炊夢 神山一郎 (杏邨)





「左」 大黒 勇(鳳陽)「右」

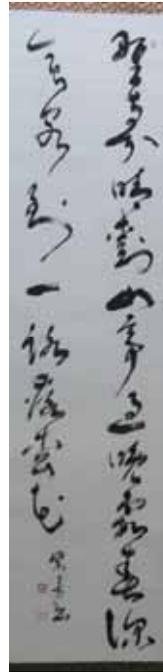


賀歌

大原政子



秋蟬 中田京子



山行

原田喜美(紫芳)



長樂

小宮山節子(柏風)

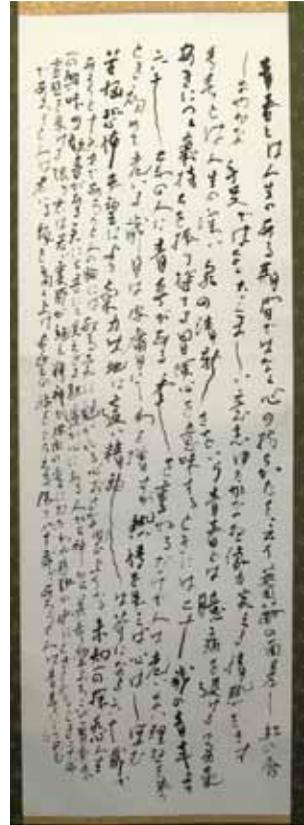


秋の日の 栗田 咲

和顔愛語  
小口英世  
〔南石〕



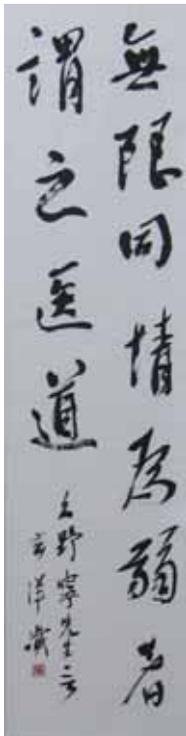
蕪村の句 大西正一 (石聲)



竹里館

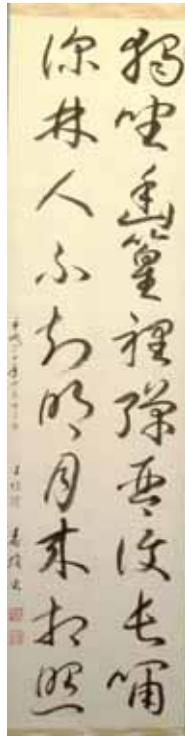
池田壽雄 (白樂)

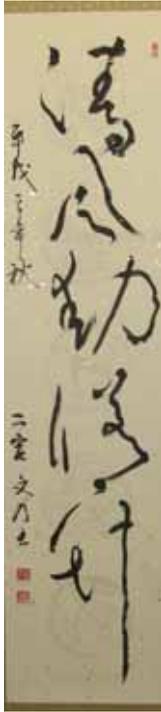
青春 (サミュエル・ウルマンの詩)  
竹内栄樹 (茯苓)



久野 寧先生の言葉

御手洗玄洋 (玄洋)





清風動脩竹

二宮文乃(綾風)

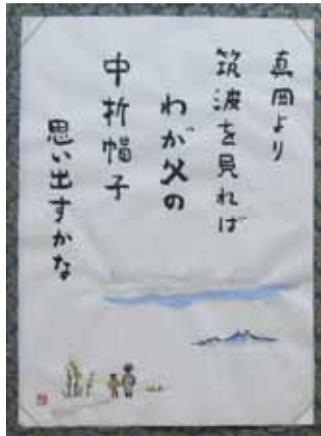
父の中折帽子

田村豊幸



借老洞穴

新関寛二  
(湖舟)



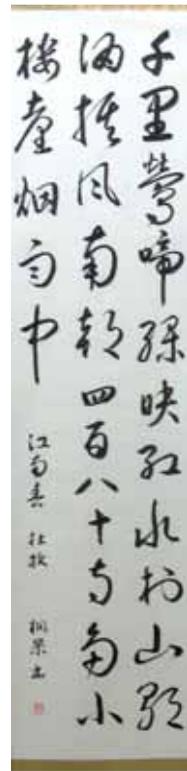
ホームページには全作品を掲載

HPは漢字の 医家芸術 で検索できます。

今秋の書道展、会期を変更しました

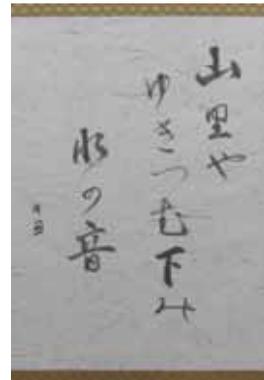
先に誌上(文芸特集号)でお知らせした  
新年度医家書道展の会期は10月12日(月・  
祭)～18日(日)までに変更しました。

美術部の会場変更に伴うものです。詳細は  
追ってお知らせいたします。



江南春

中村純一(桐果)



正岡子規の句

長谷部キヨ

# 第 47 回ドクターズ ファミリーコンサート 神宮外苑に高らかに響く

**プログラム 1. 「みんなで歌おう」** 今年も元コーロ・アキの刑部美也子さんとメンバーの皆さん(写真⑦)にリードしてもらい、ドイツ民謡「モミの木」を歌いました。

プログラム1を  
指導する  
刑部美也子



2008 年は「津田ホール」という立派な会場に恵まれて 13 番組、会員のほか協賛の方々を含め 55 人ほどが出演しました。

内容も会場に負けず素敵な歌声や演奏が、神宮外苑の森に、高らかに響きました。

以下に写真と出演者名を記録して紹介します(氏名の太字は会員・敬称略)。

## 7. 女声コーラス 元コーロ・アキ ピアノ伴奏 刑部美也子

「浜千鳥」弘田龍太郎 「希望のささやき」  
ホーソン 星に願いを」ハーリン  
ソプラノ 宮崎洋子 恩田弘子 広瀬珠恵  
田代久子 アルト 砂井 馨 矢部奏子  
小川昭子 (所要のためお休み)

## 2. テノール独唱 浅野 尚

ピアノ伴奏 西島 麻子  
「ナポリのマンドリナータ」 タリアフェリ  
「小さな空」 武満 徹  
「愛のメランコリー」 ダンツイ



3. フルート独奏 田玉真澄  
ピアノ伴奏 中山 真理  
「天上のフルート ～春・夏・秋」  
作曲：安田芙充央

4. テノール独唱 塚 裕  
ピアノ伴奏 人見 共  
「さすらいの人」 シューベルト  
「秘 密」 ベートーヴェン



5. ギター独奏 岩崎 哲  
「ラ・クンパルシータ」  
M. ロドリゲス  
「禁じられた遊び」 N. イエペス



6. バイオリン独奏 中村 雄彦 ピアノ伴奏 豊島 玲子  
モーツァルト ドイツ舞曲集より 「1番」  
「3番 かなりあ」 「4番 ライエル奏き」 「5番 そりに乗って」



8. ソプラノ・バス二重唱 菊地 録二  
 辻村 倫子 ピアノ伴奏 長谷川由希  
 二重唱 オペラばらの騎士から「終曲」  
 シュトラウス  
 メサイアから詠唱(ソプラノ)「何と美しいことか 彼らの足跡は！」アリオオーゾ  
 (バリトン)「注目してみよ 主の悲しみに……」ヘンデル  
 二重唱 「サンタルチア」 ナポリ民謡

### 9. 歌とピアノ Bell Ring

二重唱 ソプラノ 鈴木美根子

アルト 岩瀬典子 (写真①)

ピアノ伴奏 岩渕 雅俊

「愛・天の声」 ドニゼッティ

「舟歌」 オッフエンバック

独 唱 鈴木美根子 ピアノ伴奏 鈴木育子

リナルドより「私を泣かせてください」ヘ

ンデル フィガロの結婚より「愛の神よ

照覧あれ」 モーツァルト

ピアノ独奏 鈴木育子 ピアノソナタ

作品7第1楽章 グリーグ (写真②)





「アヴェ・ヴェルム・コルプス」 モーツァルト 「クリスマス  
 キャロルメドレー」 天なる神には～荒野のはてに～ひいらぎかざ  
 ろうよ 「ホワイトクリスマス」 バーリン 「ハッピークリ  
 スマス」 ジョン・レノン (編曲 中山真理)  
 第1 マンドリン 亀岡智子 第2 マンドリン 木内微子 マンド  
 ラ 笹美智子 ギター 高橋妙子 キーボード 中山真理

11. ソプラノ独唱 松木耀子 「岩の上の羊飼い」 シューベルト  
 ピアノ伴奏 外山由紀  
 クラリネット 飯塚崇志

12. 室内楽 「クラリネット五重奏曲」  
 第4 楽章 ブラームス  
 クラリネット 飯塚崇志 第1バイ  
 オリン 近藤淳子 第2バイオリ  
 ン 菅 節士 ビオラ 郷野恭広  
 チェロ 石川 哲





アンネンポルカを演奏するJAMA O

13・交響曲 JAMA O (日本医家芸術

クラブ交響楽団)

「アンネンポルカ」 シュトラウス

指揮 菅 節士

歌劇トスカから「歌に生き愛に生き」

プッチーニ

指揮 飯塚崇志

ソプラノ 松木 耀子

「交響曲第40番第1楽章」モーツァルト

「南国のバラ」 シュトラウス

指揮 石川 哲

バイオリン 菅 節士 菊地忠昭

中嶋善仁 近藤淳子 荻野留美

吉澤祐子 高橋尚子 山本しのぶ

ヴィオラ 石川園子 大江尹利子

金原憲治 郷野恭広

チェロ 石川 哲 伊村 衛

飯島惟清

コントラバス 萩野芳造 平沼豊一

フルート 浅見行雄 田中和子

オーボエ 飯田 明

クラリネット 飯塚崇志

ホルン 飯塚紀志子

ファゴット 相川 弘

パーカッション 新井愛彦

ピアノ 吉澤 福太郎

外山由紀



前回は、恩師とバイオリンを演奏した吉澤福太郎君は、今回はパーカッションで活躍です。

# 舞踊・長唄など久々豪華な顔ぶれ

昨秋は久しぶりに日舞が3題、長唄4題のほか、清元、小唄、仕舞と豪華な顔ぶれが揃いました。以下に、当日の



各出演者の出来栄を邦楽評論家の宮西芳緒氏に紹介して戴きました(編集の都合により一部順番を入れ替え)。なお写真の一部は「スナガ企画」に協力をお願いしました。

## 評 邦楽評論家 宮西芳緒

「勤労感謝の日」の日本橋三越劇場。

平成二十年も例年通り、日本医家芸術クラブ主催による医家芸術祭「邦楽祭」が開催された。第五十四回を迎える。本業の傍ら、年に一度の公演に向けて情熱を傾け、精進を積んで来られた先生方の成果がこの日、発表される。

毎年欠かさず出演されているご定連の先生は今回は何を上演されるのか、数年振りに出演される先生は前回はいつ、何を上演されていたか、などと思いを巡ら

せながら、私は自分で勝手に決めていく片隅のいつもの席についた。

幕前で、日本医家芸術クラブ委員長で邦楽部委員の太田怜先生(写真右上)が「開会のことば」三連休の中日に足を運んでくれた観客にまず感謝、そして、「題名のない音楽会」で見た高校生の演奏姿に自分たちを重ねて、「この年齢になってもハマっている姿は感動的」と自讃されるのも微笑ましい。

以下全十四番、ゆったりとした優しい、満たされた時間に身を委ねる。

### 一、舞囃子『小督』(観世流)

沢田又一先生(神奈川県横浜市、耳鼻咽喉科)の大鼓で梅津浄子先生(同じく横浜市、耳鼻咽喉科)のシテによる舞囃子は、ここ数年来、開幕の重責を担っている。能舞台になぞらえて上手サイドに地謡、正面奥の下手から大鼓、小鼓、笛が居並ぶ(写真次ページ)。

帝の命を受けて小督局の行方を探索する源仲国は、箏の音をたよりに、隠棲する小督局を探し当てる。小督の奏でる想夫恋、帝の文使いとして月の嵯峨野に駒駆ける仲国。小督は文を受け取り、その名残の酒宴で男舞を舞う仲国。優雅で哀愁に満ちた曲の一場を、さらりと切り取って描く。

### 二、連調『鉢の木』薪の段(観世流)

小鼓二調を平野宏先生と近藤智雄先生が連ね、謡を佐藤明德先生(ともに練馬



① 舞囃子『小督』 大鼓・沢田又一（左端）



② 連調『鉢の木』(㊤から) 近藤智雄  
平野 宏 佐藤明德

区、消化器外科)で、零落しても「武士の一分」を忘れぬ佐野源左衛門常世の逸話を聴かせる。  
戦前は人気投票で第一位を占めるほどの人気曲だったとアナウンスにあったが、

昨今の若者がこの話に接する機会はあるのだろうか。

前幕の小督仲国にしろ、少し前までは誰もが知っていた話だったのだが……と、一抹の淋しさというか、余計な感慨を抱いてしまった。

しかしそれは伝統芸能に関わる事柄のみならず、生活全般に亘るものであることは、いつの世も変わらぬ自然の流れだろう。

### 三、小唄四題

毎回、粹な糸を聴かせてくれる咲村鈴音こと川口敷子先生（江東区、看護科）は、今回も計十曲を弾く。まず女性陣の唄で四題。

島田シズ子さんの唄で、〽初髪や晴れて添う日を楽しみに〽その梳き染めのほつれ毛を〽初々しい『絵元結』と、〽逢いたさをじつとこらえて釣りし〽ぶ〽綺麗な声で風鈴の音を聞かせる『四万六千日』ともに糸は唄を立てて、静かに控えめに。

米寿を迎えたという宮田さたさんは、



③小唄4題 ④三味線・川口敷子  
唄・島田シズ子 ⑤宮田さた



④鈴木聰明  
⑤青柳の糸



⑤小唄 加藤俊男



う川口先生の糸の音は優しい。

#### 五、小唄六題

前々幕に続いては、男性三人の唄で計六曲、川口先生の糸に耳を澄ます。

加藤俊男氏は賑やかな神田祭を描く  
「江戸一番の」『獅子頭』と、芝居由縁の『世辞でまろめて』を唄う。

鈴木聰明氏はよく通る声で、月に『影絵』の首尾の松と隅田川、そして三井銀

「まわしの模様は隅田川、百本杭に都鳥」軽妙に、小粋に、『勝名のり』と、『秋ですな』しつとりと一人でお酒を飲んでます」と『手紙』を唄う。相撲甚句にも添い、口語体の詞にも添

行の菊本菊次郎氏の引退を惜しんで作詞されたという『白菊』。  
渡辺進氏は、「仮名屋小梅」を唄う芝居小唄『青柳の糸』と、「木曾節」を取り入れた『峠三里』。



#### 四、仕舞「松虫」(喜多流)

鈴木浩之先生(練馬区、消化器外科)写真⑥が舞う。阿倍野の原で松虫の音にひかれて草むらに入って死んだ友を偲ぶ曲。阿倍野の松虫塚はいま、歩道を塞ぐような形でその存在を示している。ここでいう松虫は、いまの鈴虫のことらしい。舞台にふっと、秋の風が通った。



## 六、長唄『時雨西行』

大森滉子先生（文京区、施設副理事長）、吉住小三郎師ほかの唄、吉住小茂々師ほかの三味線で、一夜の宿を借りた西行法師が、唄見れば不思議や「遊女が忽ち普賢菩薩と頭げんじる様、

〽実相無漏の大海に「深みのある声で、重厚に奇瑞を描く。大きな懐で包み込むような一幕。

## 七、舞踊（長唄）『浦島』

山梨県立中央病院名誉院長、花柳和之城こと飯田文良先生（山梨県笛吹市、外科）は、二枚扇に挑んで、忘れかねたる「童宮での楽しかった日々や乙姫の面影を偲び、玉手箱を開いて白髪の老人と



なる浦島を踊る（写真⑤）。浦島伝説は各地にあるが、四国を訪ねた折り、浦島由縁の地が散在する半島があった。車で半島をぐるりと廻って、玉手箱から立ち昇った煙が山になったという言い伝えのその山に登ったことが、懐かしく思い出された。

## 九、小唄二題

今回も芝居の名科白、名場面を機嫌よさそうにさらりと唄う山田新太郎先生（練馬区、整形外科）、糸は喜む良宏子師。『あわぎ鴉』は「鈴ヶ森」の幡随院長兵衛と白井権八。



⑨小唄 2 題 山田新太郎 ⑤

芝居がお好きなのだろうと感入る。

もう一曲は『籠釣瓶』の八ッ橋・佐野次郎左衛門の歌舞伎二題。改めて、さぞ



写真④ ⑧長唄『靱猿』  
 (上段中央) 山崎律子  
 写真⑤ 清元『お祭り』  
 (左から2人目 太田  
 伶、その隣 菅又淳

## 八、長唄『靱猿』

「矢入れをうつぼと名付けしは」その由来から語り出し、無邪気な仔猿を巡って、大名の難題と猿曳きの愛情の織り成すドラマを、華やかで賑やかな中に描き、力強い、本格的演奏を聴かせる。三味線はたつぷりと丁寧に刻み込んでいくのが快い。

杵屋勝くに子こと山崎律子先生(台東区、皮膚科)、杵屋勝国師ほかの三味線。唄は杵屋勝四郎師ほか。囃子付。

## 十、清元『お祭り』

菅又淳先生(大田区、精神科)、太田伶先生(世田谷区、循環器科)、清元延宗女仁師の浄瑠璃、清元延志寿佳師ほかの三味線で、お得意の清元、江戸っ子の粋が感じられる一幕。

「申西の」声もしっかりと、お手が鳴るから」ノリも上機嫌に「実にも上なき獅子王の万歳千秋」と「お江戸

の恵み」を寿ぐ。終始気持ちよく、いつまでもそのお元気な声を聴かせて欲しい。

## 十一、長唄『鏡獅子』

中島信子先生(中央区、眼科)、東音君田喜美子師ほかの三味線、東音浅見文字師ほかの三味線。囃子付。写真次頁。

弥生は割愛して間の胡蝶の件り「世の中」に絶えて花香のなかりせば」から。

いつもながら切れ味もよく、華やかで明るい。大薩摩も充実して、ノチの威厳も充分。「獅子は勇んでくるくるくる」と長い白い毛の爽やかな獅子の勇壮に舞う姿が、あたかも眼の前に浮かんで来るようだった。

## 十二、舞踊(長唄)『吾妻八景』

小林勇先生(神奈川県横浜市、産婦人科)が優雅に、丁寧な、美しく踊る。最近ではどこか足袋の上の素足の部分まで見せて踊る立場が多いが、小林



⑪長唄『鏡獅子』 (上段中央) 中島信子



先生は藤間の亡き六世宗家（勘十郎師）を思わせるほど袴の裾を長めに着て、柔らかなこなしで、情緒豊かに、〽八つの名所」を踊り綴った<sup>⑩</sup>写真<sup>⑩</sup>。



### 十三、舞踊 (一中節)

#### 『都見物左衛門』

藤間藤三之助と高橋妙子先生（中央区、耳鼻咽喉科）がある。「都見物左衛門」とは、そもそも、どこかの在の者か。都の名所を訪ねていろいろな姿を舞い重ねて行くそこに、都（京都）を見物して廻る江戸者の「風」が、高橋先生の踊りからは薫って来るようだ。  
亡き藤間藤子師の「風」が思い出された<sup>⑩</sup>写真<sup>⑩</sup>。

### 十四、長唄『安達ヶ原』

大切は東音福田克也師ほかの唄で、杵屋和重一、東音前村八重子こと前村八重子先生東村山市、小児科、杵屋栄敏郎師ほかの三味線。囃子付<sup>⑩</sup>写真<sup>⑩</sup>次頁に。

〽旅の衣は篠懸の<sup>⑩</sup>

山伏一行の出から空気が張り詰める。

「わらわが帰らんまで」 閨の内を覗くなというやりとり、老女の疑心と、それを晴らす阿闍梨の明晰が、くつきりと描き出される。

時代味と古怪さが需められる大曲だが、それを聴かせた上でなお、明快な演奏である。

〽閨に紛れて失せにけり」まで、立三味線の前村先生が、その小柄な姿からは想像できない。

充実した内なる力で一曲をリードしている姿に、聴く方もパワーをいただいた想いがして、爽やかな後味が残った。



⑭長唄『安達ヶ原』 前村八重子（上段中央）



「閉会のことば」は、同クラブ邦楽部委員の中島信子先生（写真左）。司会・アナウンスは高松真弓さん。

時代は変わってしまったのかもしれないが、稽古は「修業」、芸は「道」。医の技術は日々格段の進歩を遂げているが、毎日のように伝えられる陰惨なニュースを見ると、「こころ」の病は確実に増えているように思われてならない。

「芸術」が、「芸」の「道」が、そうした「こころ」を癒す一つの手段としても、広く普及することを願いたい。



大森混子



山崎律子



中島信子



菅又 淳



太田 怜



前村八重子